
金貸シアネット

伽砂杜ともみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金貸しアネツロ

【Nコード】

N3894Q

【作者名】

伽砂社ともみ

【あらすじ】

金貸し業を営んでいる、ジュダス商会。アネツロはジュダスの眼に映る人間模様は、万華鏡のように不安定である。それぞれに持つ色が揺らぐたび、人間の本性が顔を覗かせる。

喧騒の市1

簡素な板張りの一室。窓際には、重量のありそうな机と椅子が置かれていた。美しい彫刻が施されたそれらは、とても部屋に似合っているとは思えない。

揃いで彫られた椅子に腰をかけ、細身の男　アネツロ「ジユダスが机に広げられた書類に視線を落とし、眼鏡の細い銀縁が、外からの光で白く反射している。

扉は、きつちりと閉められているにもかかわらず、向こう側にある木の階段の軋みが聞こえ、アネツロは扉の方へと視線をやった。

律儀に扉を叩き、返事があるまで開けようとはしない相手に、ゆつくりと眼鏡を外してから、入れと短く声をかけた。

「報告します。本日七件の徴収を完了致しました」

入室してすぐ、金髪の男は少し疲れた顔をしながらも、生真面目に数枚の書類と重そうな皮袋を、机に乗せた。

「そうですか」

軽く書類に目を通してから、皮袋を手にもち上げる。

まだ直立の姿勢を崩さない男に声をかける事もせず、背後にある続き扉へとアネツロは消え、すぐに戻ってきた。

しっかりと鍵を閉めてから、机に広げていた書類をまとめ木の箱にしまうと、動かずに待つ男に声をかける。

「モネータ。少し外に出ますが、ついてきますか？」

「はい」

モネータと呼ばれた男は、ここ数日の内に雇われたばかりである。だが、初日から彼の発言に対して、頷くしか道はない事を覚えざるを得なかった。

このジユダス商会という金貸しの一人として、働く事になるとは考えもしなかったが、雇われてから数日、諦めにも似た気持ちがモネータの中で大きく居座っていた。

モネータが来てからというものの、仕事に関しては順調この上なかつた。金髪碧眼でがたいが大きく、17歳にしては端正な面持ちで、丁寧な物腰をしている為、徴収先の女性人気が尋常ではないのだ。女に人気という事は、男に疎まれているのかと思えば、そうでもない。だからこそモネータは困っていた。

これだけの容姿を持って生まれたにもかかわらず、彼は女の接し方が分からないのだ。

だが、だからこそ言うべきか、年齢の割りにすれていないところ、女達にうけていると言っても過言ではないし、その様子を面白がった男達は助け舟を出す事もしない。

それを見越してかは分からないが、アネツ口が指定する徴収先は、既婚女性や物売りの女主人宅などが多かった。

「モネータ」

身支度を整えたアネツ口の声に促され、いつの間にかうつむいてしまっていた顔を上げ、黙って後をついて扉の外に出た。

軋む階段を降りきった先の扉を開ければ、屋外に出る。

まだ陽は高く、通りには人がごった返していた。

グラン小国一華やかだと言われ、月に二度ほど開催される市が、今日開かれる日であった。通りには商店が建ち並び、色とりどりの商品が溢れ、威勢の良い声が飛び交う。人が動けば土煙が立ち、空気が良いとはいえないが、それでも活気でみなぎっていた。

遠く近く、金髪頭を見て歓声を上げる者がいたが、アネツ口と並ぶように歩けば、声をかけてくる者はいない。

「モネータ、お前は実に良くやってくれているようですね」

「私は与えられた仕事を、こなしているだけです」

「謙遜などせずとも、このままの調子で頼みますよ」

笑顔を崩さずに言ってくるアネツ口に、返す言葉が見つからず、頷くとどまった。

このまま、と言ったのだ。試練はまだまだ続くのだろう。ため息など吐く事もままならず、モネータはただ歩いた。

人通りが更に多くなったと感じたアネツ口の左脇を、後ろからすり抜けようとした薄汚れた少年を、モネータは見逃さなかった。アネツ口の進路を塞ぐように、大きく一步踏み出す。

風を感じたと思ったのか、大きな目がモネータを見た。内心、少し驚きながらも、モネータは容赦なく張り飛ばす。軽く小さなその身体は、耐え切れずに吹き飛び、壁に叩きつけられた。

何が起こったのか、考える間もなかった。一瞬の内に、少年は昏倒していた。

周囲にいた者達は、突然の出来事にざわめいたが、倒れている少年を見て、状況を判断したのだろう。

あっさりと興味を失ったように、人の流れが元に戻った。

モネータが少年の近くに膝をつき、意識を失っていても手放さなかった、アネツ口の金袋を取り返す。

「どうぞ、アネツ口様」

「これは、気がつきませんでしたね」

笑みが浮かんでいるが、ダークブラウンの眼は笑っていない。

モネータの横に屈みこみ、少しして楽しげに口元をほころばせた。

「モネータ。この者を連れ帰りますよ」

「は？ 盗人を、ですか？」

驚愕に眼を見開いたモネータに、アネツ口は当然だと頷いて見せる。

「私は、連れ帰る。と言ったのです、聞こえませんでしたか？」

「いえ。ですが……」

「私の考えに、問題でも？」

瞳に、凍りつかせるほどの光が見えた気がしたが、モネータは頷く事も出来ずにいた。

正しくない人間を、どうして引き入れようというのか。そのまま領主の私兵に引き渡せば済むはずである。

「もう一人、小間使いが欲しかった所です。丁度良かった」

「小間使い、ですか」

「モネータ一人では、何事も行き届きませんから」

「仕事は成し遂げています。問題はないはずですが」

「任された仕事をこなすだけならば、その辺の野良犬に教えこんでも出来る。お前には、もう少し融通というものを学んで欲しいのですがね」

納得がいかない、という表情でアネツロを見たが、それだけだった。

ぐったりと動かない少年を、肩に担ぎ上げる。予想以上に軽いその身体は、布越しでも分かるほど骨ばっていて、痛々しい。

彼が担ぎ上げたのを眺めながら、アネツロは来た道に戻るでもなく、足を先へと向けた。

モネータが横に並んでくるのを確認し、アネツロが口を開く。

「人間は、綺麗ごとだけでは、生きてはいけないのですよ」

「だからといって、分かっている悪事をなすというのは、間違っていると思います」

「そうですね？ では、この子供は、どうしたら生きていけるのです」

「それは……孤児院に入る、とか。方法などいくらでもあるでしょう」

「そこでまかなわれる金は、どこから出ていると？」

「税です。その使い道は、領主の裁定で、決められているはずですよ」

「ならば、その一部は私の金でもある。だったら私が一人くらい養っても、問題ないでしょう」

快活に笑うアネツロに、モネータは複雑な顔をした。

正しいようで、何か違う。しばらく歩き、疑問が形になったところで、また口を開いた。

「アネツロ様。やはり、問題があります。第一に、こいつは税とは無関係な立ち位置でしょう」

「税と無関係であれば、なおさら私が子供を引き込んで、問題ないでしょう」

しれつとした顔で頷いて見せるアネツロに、モネータは負けじと声をしぼり出す。

「悪人は、悪人らしく。裁かれるべき場所にいるのが道理です」「道理ですか。ならば、この子供は何をしたのですか？」

笑顔を向けられ、モネータは一瞬言葉に詰まる。

喧騒の中を、苦にするでもなく。のんびりと、人の流れに乗って歩くアネツロに目を向けて、モネータは澄んだ空色の瞳を少年に移した。

「何って。こいつはアネツロ様の金袋を、盗ったじゃないですか」

「私の金袋は、懐にありますよ」

「それは、私を取り返したからでしょう」

「おや、そうでしたか？」

モネータは、切れ長の目を見開いて、絶句した。

その様子に、アネツロが口の端を持ち上げる。

「冗談ですよ。ただ、考えてもみなさい。生きるとは、どういう事なのかを。この子供が気に入らないのならば、お前が教えてやればいい。逆に、教えられる事もあるでしょう」

「盗人に教えられる事など、あるはずありません」

渋い顔で言い返せば、アネツロはまた、楽しげに笑い声をあげた。

喧騒の市2

出店や金を貸している店、ひとつひとつに顔を出して歩く。

顔を強張らせ、慌てて伺いを立てにくる店主には目もくれず、アネツ口は人の入り具合や、商品の品質、無駄に配置されていないかを確認しながら、次の店へと移る。

花売りの店で、アネツ口は足を止めた。

二年前に、南から来たというふくよかな体つきの男が金を借り、花売りを始めていた。最初は南の方で咲くといわれる花々に、この辺りの婦人達は飛びついてしたが、ここ最近の様子がおかしい。

モネータからの婦女子情報でも、こうして店の前で見ても、その異変がはつきりと分かるほどに。

「こ、これはアネツ口さん！」

他の店と同様、奥から慌てて出てきた店主のダニーを一瞥し、店内に目を向け、眉をひそめた。

かなりの人出であるというのに、色合いで目を引くはずの花屋は閑散としている。アネツ口の様子に気がついたダニーが、汗をかきながら首をすくめた。

「その、前回の市ではかなりの客が入ったんですけどねえ。どういうわけか、その、分からない次第です」

「本当に、分からないのですか？」

はつきりと区切るように声をかければ、ダニーは丸々とした大きな身体を、精一杯小さくして頷いた。仕方ないとばかりに、アネツ口が店の前面に置いてある白い花を指差す。

「前回の市では、色合いの強い花が前面に置かれていました。白も悪くはないと思いますが、淡い色ばかりを表に出しては、白基調の店壁が多い中で、目を引くわけもないでしょう」

「し、しかしですな。花は生物で、売り切らなきゃいけないわけですからとしても商売ですからね」

「商売だと言うのなら、少し考えれば分かるはずでは？」

腕を組み、長身を生かして、少し語彙を強めてきたダニーを見下した。

ダニーの歯軋りが聞こえてきそうな顔を、アネツ口は平然と見返している。静かな応酬は、行き交う人々から見れば、値段の交渉とでも思う程度だろう。隣近所の人間が顔をのぞかせたが、アネツ口の姿を見て、隠れるように引き返していく。

「少し、提案を」

お互い引かない両者に代わり、肩に荷を担いだモネータが助け舟を出す。

ダニーは燃えるような眼を二人に向けたが、彼はいつも事と意に介さず、話を先へと進めた。

「ご婦人達が、小さなブーケのような物が多くあれば良いのに、と言う話をよく聞かれました。余った品があるなら、そういう物をたくさん作っておいても問題ないのではないでしょうか」

「ブーケか、しかしだな。それをすると、やれこの色が気に入らん。違う花に入れ替えてくれ、だの……」

モネータの言葉に、アネツ口は右手をアゴにあて、少し思案してから口の端を持ち上げた。

「ならばバラ売りで、好みのブーケを作るといふ看板を出しなさい。本数と値段を決め、その辺にあるリボンでも使えば良いではないですか。売り切りたい品があるのなら、口八丁で多めに入れてやるとか、どうとでもなる。もちろん、色味の強い花も表にある花と入れ替える事」

「し、しかしですね……」

「奥で尻を冷やす時間があるのなら、入れ替えくらい出来るのでは？ それとも、私から借りた金を、人が入らなかつたからと踏み倒すつもりでしたか？」

「そ、そのような事は……」

冷たく光る眼に、ダニーは小さく肩を震わせ、うなだれた。

「一回りしたら、確認に来ます。働く事です」

言うべき事は言ったばかりに店を後にした。

そろそろ潮時だと、アネツ口は決断した。品揃えが、目に見えて悪過ぎる。仕入れをおざなりにし、働く意欲すらあの店主には感じられない。

「モネータ、見張れ」

「分かりました」

アネツ口の口調が変わった際、その表情を覗き見たが、張り付けた笑顔は揺るがない。

その後も何件か回り、最後に焼きたてパンの良い香りを漂わせている店をのぞく。並ぶ人まで出ている店から、老婆が若い女性に後を任せ、にこやかに出迎えた。

「おや、アネツ口さん。景気は良くなさそうだねえ」

「困りましたね。そう見えますか？」

「そうねえ、ここ一月はそんな顔に見えるけど。ちゃんと食べてるのかい？」

「メリツシュさんには、かないませんね」

作り物ではない顔で苦笑して見せたアネツ口は、他では決して見られない。

白髪頭でしわだらけの顔を、さらに深く刻みながら楽しそうに笑う彼女に子供扱いされても、嫌な気持ちはいしないのだろう。

「メリツシュさんの店は、変わらず繁盛していますね」

「商売だから、色々あるけれど。好きで続けてる事で、こんなにも人が来てくれて。ありがたい事よねえ」

「そうですね。羨ましいです」

「何言ってるの！アネツ口さんだって、好きで続けてるんですよ。うちは次で借金も終わるけど、いつでもきなさいよ。このババが生きてる間なら、話くらい聞いてやれるからね。お金は貸せないけどさ」

それを聞いて、アネツ口は声をあげて笑った。モネータも、担い

でいる少年に顔を向け、咳払いしてごまかす。

「では、長生きしていただかないと」

笑顔でその場を後にしようとする、メリッシュが呼び止めてくる。

大きな丸パンを三つ、紙袋に入れ差し出してきた。

「持っていきなさいよ。ちゃんと食べて、よく寝るのよ」

「ありがとうございます」

モネータに受け取らせ、金袋から十ソルディ硬貨を三枚取り出し、メリッシュに握らせる。

「あげるって言っても、いつも聞かないわねえ」

「もちろんです。パンは後でモネータに買いに走らせる所でしたし、ちゃんとお代を受けて頂かなくては、返済に響いても困りますので」

「仕事熱心ですこと」

細い肩をすくめて見せながら、それでもメリッシュは柔らかく笑った。

軽く手を上げて別れると、もう一度花売りの店へと足を向ける。

太陽は頂点を越え、人混みは更に増しているようだった。むせ返るような熱気、そして土煙が落ち着く気配はない。

戻る道で買い物を済ませながら進むアネツ口に、モネータは口を開いた。

「金貸しと聞いて、悪道者のする事だと思っていましたが、実際はそうでもないのですね」

突然の言葉に、アネツ口は自分と同じくらいの位置にある青い瞳を、横目で見る。

「悪道者ですよ」

「しかし、これまでを見てみると、どうしてもそうは思えません」

「本には載っていないかったか？金を貸して、余分に金を徴収する。金を戻す為ならば、どんな事でもする。そのどこが悪道ではないと？」

「しかしアネツ口様の取る方法は、悪道とは呼べません。商売の事

ですし、お互いに利益となるように働きかけているではないですか」「決して踏み倒される事もない。という事実は、どう説明を？」

「それは。だから普段の働きかけのおかげでしょう」

吸い込まれそうなほど、純粋な色を湛えた瞳に、アネツ口は居心地が悪そうに肩をすくめた。

純粋培養を地でいく彼に、何を言っても否定するだろう。

モネータと知り合う前の話をしてやるのも面白い、という思いがないわけではない。しかし、今この時が、その機会であるとも思えない。

アネツ口は、苦笑するにとどまった。

それを照れ隠しだと思ったのが、モネータは確信に満ちた顔つきで、後をついてくる。

気絶したままの少年を担ぎなおそうと動かせば、小さな呻き声とともに、目を開けた。

「眼が覚めたか」

モネータが、その声をかけたが、少年はぼんやりと地面を眺めている。

しかし、次第に頭がはつきりしてきたのだろう、今ある状況を把握して、モネータの頑丈な肩の上で暴れ始めた。

「放せっ！ 放せよ、この変態野郎！」

声変わりもしていないのだろう、女のように甲高い声でわめき、暴れ続ける少年に顔を歪めながらも、彼の言葉を聞きとがめた。

「変態、だと？」

「ああ、そうさ！ 拉致なんて、姑息な真似しやがって。おれをどうにかするつもりなんだろ！ 大人のくせに、これを変態でなくて何て言うんだよ！」

興味本位で、人々が振り返ってくる。

ただでさえ目立つ容姿をしたモネータは、あっという間に注目的になってしまった。

「拉致でも、変態でもない。お前は悪事を働いた、だから捕獲した」

「……しくった。私兵かよ」

「違いますよ。お前は私の金袋に手を出したのです」

ゆったりとした動作で、少年の髪をつかみ、顔を上げさせる。

苦痛に顔を歪めながら、少年は両手でモネータの肩口と腕をつかみ、出来るだけ痛みのない体勢をとった。そして、アネツ口を認め、息を呑む。

「まさか……」

「まだ私に手出しをするような、度胸のある人間がこの町にいるとはね。油断していたつもりはありませんでしたが、いい腕をしますね」

はつきりと見てとれるほど、血の気が引いてしまっていたが、それでも少年は必死に虚勢を張った。

「私兵にでもなんでも、突き出せばいいだろ！」

「口が悪いですね」

「うるせえな！ 関係ないだろ」

パニックになったのか、咬みつかんばかりに食ってかかる少年に、モネータは眉間にしわを寄せた。

だが、上着を握りしめてくるその小さな手が震えている事に気が付き、アネツ口に視線を送り、少年が逃げられないように押さえなおす。

平然とした顔をしていたアネツ口だったが、ふいに口の端を持ち上げて見せた。

「な、なんだよ。気持ち悪い」

「男の振りはしているが、やはり女だな。口数が多い」

思わず口をつぐんだ少年　のように見えた少女。言葉を失ったという事は、事実なのだろう。

だが一番言葉を失っていたのは、モネータだった。

まさか女だとは思っていなかった。痩せ細っていて、まったく柔らかい所もなく。男だと思っていたからこそ、適当に肩に担いでいた。

尋常ではなく汗をかき始めたモネータを、面白そうに眺めていると、先に口を開いたのは少女の方だった。

「女だから、なんだって言うんだよ！ バカにするな！」

「バカになどしていませんよ。女だからこそ、役に立つのではありませんか」

「……役に、立つだと？」

「ええ。お前は私が預かりました」

「いらねえよ！ おれは一人で生きてくんだ」

少女が目を逸らせば、汚れた短髪をもう一度強く引っ張り、アネツ口は顔を寄せる。

痩せて大きく見えるハニーブラウンの瞳が、冷酷な表情へと豹変した彼を映し、恐怖におののいた。

「ならば、慰謝料をもらいましょうか」

「……なんのだよ」

「金袋を盗られた時の、心の痛みの分ですよ」

「そんな見えないようなもんに出す金なんてねえよ。第一、金持ってるなら、スリなんてしてねえだろ」

「払う気は、ないと？」

「ないね。さあ、私兵にでも突き出せばいいだろ」

切れ長の目を細め、アネツ口は汚れた頭から手を離した。

少女が痛みから逃れられた安堵感に、モネータの上着を握る手を緩めれば、小さな顔に平手が飛ぶ。

辺りから女性の悲鳴が聞こえたが、それでも口答えしかけた少女へ、容赦なく繰り返し、もう一度髪をつかんで引き上げた。

「お前に、選択肢はない」

泣く事もせず、少女は血の混じったツバを、アネツ口に向かって吐く。

野次馬がまた声をあげたが、モネータはとっさにパンの袋を持ち上げ遮った。

袋が下げられた時、アネツ口の表情に怒りはなく、満足気に見える

た。

「名前は？」

低い声に、自由にならない頭のせいで顔は背けられないが、それでも目の前の男から瞳を逸らす。

反抗は許さないと、髪を強く引つ張られ、悔しそうに顔を歪めた彼女は、吐き捨てるように声を出した。

「カリダ」

彼女の頭から手を離れたアネツ口は、笑顔の仮面をかぶりなおす。「カリダ。私への慰謝料は、貸しにしておこつ。踏み倒す事は、命を捨てる事だと思いなさい」

「……返すあてなんてないぞ。それに、殴られた分の借りは、どう返してくれんだよ」

「私は口の悪い子供のシツケをしただけです。それについて、貸し借りは発生するとは思えませんね」

「殴られて、おれは傷ついた。その分の慰謝料寄せよ。なんなら、お前への慰謝料でチャラにしてやってもいいんだぜ」

カリダの言葉を、アネツ口は一笑に付す。

「ならば、私の金袋を返していただきましょうか」

「……取り返したんじゃないのかよ」

「誰がそんな事を言いました？ 私は、スリに遭った。それによって受けた実害と精神的苦痛を、慰謝料と共に返してもらつ。と言つたのですよ」

「捕まつたんだから、取り返したんだろ」

「誰が、そんな話を信じるのでしょうかね」

細められた目は、表情とは違い柔らかいものは見えない。

少女は自分のやってきた事を思い返し、歯噛みする。

「金がないのならば、返す手助けはしましょう」

「……手助け？」

「ええ、私の手足となって働いてもらいますよ」

反論の声をあげようとした彼女の背中を、モネータが右手で押さ

えつけた。

腹が肩に圧迫され、くぐもった声しか出せなかったカリダは、金髪男をにらみつけたが、真剣な色を帯びた青い瞳に、言葉を詰まらせる。

小さく首を横に振って見せた彼に、少しだけ顔を赤くして、顔を逸らした。

「……どうせ、やるしかねえんだろ」

「交渉成立ですね。物分りが良くて、助かります」

色々と言いたい事が脳裏に押し寄せたが、奥歯を噛みしめて耐える。

身を翻し、アネツ口はゆったりと歩き始める。緊張した面持ちの野次馬達は、一様に安堵の表情を浮かべた。静まり返っていた市は、すぐに喧騒を取り戻す。

先ほどよりも騒がしく聞こえてくる人声の渦に紛れ、カリダは降りてくれと声をあげ、小さく身をよじらせた。

カリダ

花屋の数件先で、モネータに少女を降ろすよう、合図を送る。

丁重に彼女を降ろしたモネータは、金髪が目立たないよう腰に巻いていた布を外し、目深に巻きつけて、その足で斜向かいのチーズを売る店へと紛れ込んだ。

すぐに恰幅の良い女が出てくると、モネータに気付き、嬉しそうに話しかけている。

アネツ口は、人混みに溶け込みきれない彼を横目で眺めてから、背中を丸め、辺りを窺う少女の首を後ろからつかみ、そのまま歩くように力を加えた。

「放せよ！」

「あいにくと、首輪と引き綱を忘れたものでね」

「あいにくと、おれは犬じゃねえ」

「これから私の犬として働くのですから、問題ありません」

「大問題だろ！ 自分で考える脳みそ持ってんだ。どう見たって人間だろ、馬鹿にすんな！」

首の痛みに肩をすくめながらも、カリダは悪態を吐くのをやめない。

だが、アネツ口は楽しそうに口の端を持ち上げる。

「ほう。では、どれほどの脳みそをしているのですか？」

「どれほどって……」

「この場で確認してもいいのですよ」

物騒な言葉に、カリダの背から汗が流れた。やりかねない雰囲気だけは、背後からでも伝わってくる。

「あんたの目は、裏通りから町の外まで届くって聞いている。逃げようがないだろ。大人しくついて行ってやるから、放してくれよ」

「そんな男だと知っていて手を出したのですか。変わり者ですね」

「……腹が減り過ぎてて、判断つかなかっただけだ」

十歳にも満たないとも見える少女の首を解放してやり、代わりに汚れたパンの袋を押し付けた。

焼きたての香ばしいパンに、カリダはおもわず視線を落とす。

「メリツシユさんのご好意で、お前の分も入っています」

その言葉に、堪えきれず袋の中に手を突っ込みかけたが、それよりも先にアネツロの手が袋の口をふさいだ。

「私の所で働くのだから、歩きながら食べるなどという下品な真似は慎みなさい」

大きな手を押しつけて。それが叶わなくとも、紙袋を破いてでも食べたい衝動に駆られたが、カリダは大量に湧き出てくる唾液を飲み込みながら、袋を両腕で抱え込む。

「金貸しって存在が、一番下品なんじゃないのかよ」

「そうですか？ その辺りは、モネータと語り合ってみたらいいですよ」

「あの金髪の兄ちゃんか。あいつ、苦手」

ジユダス商会の看板が出ている立派な扉ではなく、建物の間に通っている細い路地に入っていくアネツロの後を、用心深くついていくカリダ。

石壁に取り付けてある、カリダの身長ほどしかない扉の鍵を二つ開け、アネツロが身を屈めて中へと消える。

薄暗かった室内が、少ししてからほんのりと温かみのある光に染まる。入りなさいという柔らかく落ち着いた声に、カリダはおそるおそる石造りの部屋へと足を踏み入れた。

「パンをテーブルに」

「いやだね。これは、おれのもんだ」

「三十ソルデイ払えるのならば、何の問題も生まれませんがね」

パンが潰れるほど力を入れて、かたくなに拒むカリダの細い右腕に鋭い痛みが走る。細いがとつともなく重たい何かで、腕を斬り落とされたのかと思うほどの痛みだった。

耐えられるわけもなく、敷き詰められた床板に袋を落とす。

「なにするんだ！」

「こちらのセリフです。さあ、パンをテーブルに」

激痛に顔を歪め、右腕に触れる。折れてはいないようだった。酷い痛みにもかかわらず皮膚は裂けていない。絶妙な力加減であった事など知るべくもないカリダは、アネツ口をにらみつける。

彼の手には、大人の腕ほどの長さがある鞭が握られていた。

酷く打てば、首くらい簡単に落とせるほどの威力はあるだろう。

革で巻いてはあるが、芯に何か埋め込んであるのでは、と思うほどの痛みだった。

痺れるような右腕をだらりとおろし、左手で落ちた袋を拾い上げ、テーブルに乗せる。

「これで、いいんだろ」

「では、奥に風呂があります。頭の前から足の先まで、汚れが落ちるまで洗いなさい」

「はあ？　なんでそんな事しなきゃいけないんだよ」

風を切る鋭い音を上げ、振り上げられた鞭先がカリダのあごを軽く打つ。カリダは、一步も動く事が出来ず、全身から汗が吹き出した。

腹が減ってなければ、避けられたのに。その言葉を飲み込んで、悔しそうに顔を歪めた。

視線を逸らさず、乾ききった口で声をしぼり出す。

「水浴びなんかしたら、奴らに馬鹿にされる」

「奴らとは？」

「……あんたには、関係のないガキどもだよ。女だから水浴びをするって。あいつらだって水浴びくらいしてるのにさ。だから、おれはクサイままでいいんだ。奴らも近づかなくなったからな」

「確かに、酷いにおいだ」

「だろ？　これが、おれの生きる術だからな」

全てを蔑んだ笑い方をするカリダに、アネツ口も頷いて見せた。

「そうですね、分かりました。ならば今、この時から考えを改めな

さい」

石の壁が圧迫感を与え、カリダは笑いを引つ込めた。小さな窓から差し込む陽の光では、十分の明かりとはならない。温かみのある光を生んでいる蝋燭ろうそくを灯したのは、そのためだろう。ゆらりと揺れる光は、少女の硬化した表情を子供ではないもののように浮き上がらせた。

「においが消えて、女だと気付かれたら襲われる。それなら死んだほうが、ましだ」

「そうですか、それなら一度死になさい」

糸切り歯を見せて、カリダは獣に近い唸り声を上げた。アネツ口が武器を手にしていたとしても関係ない。明らかな敵意を向けて、猫のように背中を丸める。

左手を腰の後ろに回した所で、動きを止めた。

「ひよつとして、探し物ですか？」

鞭を持っていない左手に、細い刀身のナイフを持ち、器用にくりりと回して見せた。

カリダが悔しそうに歯を鳴らし、目眩でも覚えたのか床にへたり込む。

刃物をテーブルに置き、アネツ口はうなだれたカリダの近くに立つ。

「本当に死ねと、私は言いましたか？」

「言ったろ」

「ある意味、そうかもしれません。飢えてどうしようもなくなつたカリダは、ここで死ぬ。ジュダス商会の犬としてのカリダが、風呂から出た時に生まれる」

「犬って言うな。それに……おれは、おれだろ。変わんねえよ」

「だったら、どんな姿でも構わないでしょう。要は心持ち次第ですよ。こう言ったほうがいいですか？ パンの一片でも食べたければ、身綺麗にしる」

少女を立ち上がらせ、アネツ口は水の張ったバスタブの前につる

たえる彼女を立たせた。

「服は捨てるから、隅に寄せておきなさい。新しい服は調達させよう。石鹸は何度も使うんだ、いいね。そのおいでは、一度や二度では効かないだろう」

「……贅沢だな」

「金ならある」

アネツコの一言に、やっとカリダが吹き出した。楽しげで明るい、年相応の笑い声が、特別に仕立てたバスルームに反響する。

「水は汲み上げ式になっています。湯は銀のレバーを横に」

「お湯が出るのか！」

「湯のほうは、町の湯殿からひいている」

「それは、なんか。ずるくないか？」

「楽でいいでしょう。いちいち火を焚く必要がない。十歳にも満たないようだが、風呂の扱いに問題はないな？」

「失礼な！ おれはこう見えても、今年で十四だ。風呂に入ってやるから、出てけよ。変態」

楽とか、そういう問題ではなくて。そう言いかけていたが、幼子扱いにカリダは声を荒げた。

一瞬驚いた表情を見せたアネツコだったが、すぐに呆れた声を出す。

「変……お前は、本当に怖いもの知らずというか、考えなしというのか」

「おっさんって言われなだけで、ましじゃないか」

「私はまだ二十五ですよ。子供からしてみたら、おっさんかもしれないがね。次にそれを言えば、首が飛びますよ」

「……言わないよ」

おもわず口に出して失敗したと、水辺の冷たさだけではない背筋の冷たさを感じ、カリダは小さく後ずさった。

アネツコはそれに構わず、バスルームから出て扉を閉める。簡易的なスライド式の鍵を、外側から音をさせずにかけた。

長鞭を巻いて留めてある特殊なベルトに、短い鞭を差込み、丈の長い緑色のベストで覆い隠した。

カリダを触り汚れてしまった手を洗ってから、ストーブに火を入れ、小さなやかんをかける。

湯が沸く間に、汚れ潰された袋から唾をかけられた側のパンを皿に乗せて、ストーブの傍に置く。潰れただけで済んだ二つの丸パンはカゴに移すと、アネツ口は深く息を吐き出した。

取引

一息吐くとすぐに、裏路地に続く扉に小石が当たった音が一度した。

「何か御用はありますか」

少年の声に、アネツ口は扉を開ける。

薄汚れた茶色の帽子をかぶった少年は、彼を見て薄笑いを浮かべた。

「毎度！ タツシエの御用聞きだよ」

「相変わらず、鼻が利くようですね」

そう言つて、タツシエと言つた少年を頭からつま先まで値踏みをするように見やると、タツシエは居心地が悪そうに苦笑した。

「ジユダスの旦那？」

「お前くらいのサイズで、衣装一式集めて貰えませんか」

「いいよ。男物？ 女物？ 靴もいるかい？」

「男物で構いませんし、全部頼みます」

「ツケ届けでいいね」

「ええ」

毎度！ と片手で少し帽子を持ち上げた少年は、スキップでもするよ様に小道を抜けていった。

風呂場のドアが激しく叩かれる。扉に二つ鍵をかけ近づけば、怒りに満ちた声の中から聞こえてくる。

「開けるよ！ くそっ、身売りもやってんのかよ！ 大人しく売ら

れるおれじゃねえぞ！」

「うるさい子供ですね。ちゃんと洗ったんですか？」

「洗ったよ！」

「指の間から、足の裏までですか？」

「……足の、裏？」

「耳の裏は？」

「……細かいな」

風呂場の嵐は、沈黙した。

ペタペタと音がする事から、もう一度洗い直す事にしたのだろう。

「ああ、風呂場の掃除もしておいて下さいね」

「………つたく、世話焼きババアかよ」

壊れない程度に扉を蹴れば、中で飛び跳ねる水音がした。

湯が沸き、茶を入れていると、またコツンと小さな音がする。

「タツシエの御用聞きだよ」

鍵を開ければ、両手一杯の衣服を抱えた少年が、満足気に笑っていた。

「どうだい？ 良品ばかりだよ。貰い物だからね、これで全部タダさ」

「さすがですね。任せた甲斐がありました」

「椅子の上でいいかい？」

アネツロが横に避ければ、彼は椅子の上に衣装を置き、三足ほどの靴は床に置く。

パンパンと手を叩き、タツシエは楽しそうに笑った。

「あと、こういう紙はあるかい？」

そう言つて、胸元から折りたたんだ紙切れを取り出す。

アネツロがそれを受け取ると、彼は満足そうに胸を張って見せた。

養子にするための書類である。あまりの手際の良さに、アネツロは苦笑した。

「相変わらず、気が回る」

「子供を引き込むから欲しいって奴もいるもんで」

へへつと笑い、茶色の目をくるりと回して見せた。

「あいつ、これから旦那の手伝いするんですか？」

「そうですね。何が仕込めるか、今から楽しみでね」

口の端を持ち上げて見せれば、タツシエは困った顔をしながらも、それでも笑った

「同情するね」

「そんな感情、ありもしない癖にですか」

少年は無言で肩を持ち上げ、手を出してくる。

十ソルデイ紙幣を十枚握らせてやれば、驚いた顔で自分の手とアネツコの顔を何度も往復させた。

「衣装代が浮いた分です。百を一枚よりは、使いやすいでしょう」

「さすが分かつてるね、助かるよ」

これからも御贖^{ごひいせ}に！ と声をかけ、タツシエは飛び出していった。

もう一度、鍵をかけ直す。

衣装の山をそのままカゴに入れ、浴布と共に風呂場の扉横に置いておく。

水音が聞こえているという事は、まだまだ時間はかかるのだろう。そう考えて、足音も立てずにその場を離れば、外から派手に扉を叩く音がした。

路地に続く扉ではなく、表通りにある店に通じる扉のほうだ。

パンをストープから離し、風呂場の鍵がかかっている事を横目で確認しながら、その右手側の、一人が通れるくらいの細い廊下を抜ける。

正面にある、先程と同じくらいの小さな木の扉にぶつかると、別の鍵を取り出して開けた。左手には事務所に繋がる階段があり、正面には通りに面した彫り物のある立派な扉が、大人しく人の到来を待ち構えている。

スリガラスに映る見知った背格好の姿に目をやり、ゆっくりと今出てきた潜り戸に鍵をかけた。

「どなたですか」

殊更ゆっくりと鍵を探しながら声をかければ、スリガラスに映った人間は、腰に手を当てた形をとる。

勝ち誇ったように、甲高い女の声が高らかに宣言してくる。

「第一級犯罪捜査班です。アネツコ〓ジュダス、ここを開けなさい

！
「装飾を施した立派な扉の鍵穴に、変わった形の鍵を差し込み、回す。」

待ち構えていたようにドアノブが回され、女が男二人を後ろに従えて踏み込んできた。

「アネツロ〃ジユダス、とうとう尻尾を出したわね。幼児虐待の容疑で、逮捕するわ！」

捕縛の為の縄を握りしめ、嬉々として鳶色の瞳を輝かせるハニーブラウンの髪を高く結び上げた女、アンシャ〃ザイエティ。動きやすそうなパンツスーツの制服に身を包んでいるが、ただ突っ立っている男二人よりも迫力に欠ける。

アネツロは柔らかい笑みを浮かべ、突き出してきた細い手を、両手で包み込むようにして、やんわりと押しとどめた。

至近距離で眼鏡越しに、鳶色の瞳をまっすぐ覗き込んでやると、白い肌は耳まで赤く染まった。

しかし、背後に控えている男二人の視線に気がついたのだろう。慌てて手を振り払い、髪型が崩れるのも気にかけず、頭を数度振って雑念を払いながら、背の高い男と猫目の男を前に押し出してくる。「よ、幼児虐待と、聞こえなかつたのかしら。残念ながら、今回は言い訳も通用しないわ。目撃者が多数いますから」

「そうですか、どなたです？」
「観光の者から、地元民までです。皆さん、快く証言してくれましてわ」

熱くなった耳を押さえながらも、二人の後ろから強気を表すように、あごを上げて見せた。

制服を着た男達には目もくれず、わざとまっすぐ彼女に視線を注いでやれば、アンシャは目を泳がせた。

「証拠は？」

「証人の多さが証拠です。それに、暴力を振るわれたという子供が出てきたら、その子こそが証拠ですわ」

「ほう、それで。その子供とやらは、どこにいるのでしょうかね。貴女の後ろには見えませんが」

アンシヤは言葉を詰まらせた。

その子供はアネツ口の手中にある。いるわけがないのだ。

「それに、あれはしつけの一環ですよ」

「しつけですって？ 見ず知らずの子供を羽交い絞めにしてまでも？」

「見ず知らずの子供に、そんな事をするはずがないでしょう。あれは私の娘です」

「そう。娘さん……むす、め？」

あんぐりと口を開け、アンシヤは驚愕に満ちた顔で息を呑んで固まった。

彼女の沈黙という職務放棄に、彼女の部下である男二人は目だけで語り合い、背の高い方 アルト＝コレットが小さく帽子を持ち上げ、苦笑した。

「ええと、失礼ながら。昨日まではいませんでしたよね。その、娘というのは？」

「先程、そこいらで拾ってきましてね。書類はこれからになりますかね。手続きを取りたいので、書類をお持ちではありませんか？」

「それは役所に行っていただけだかないと。それと、しつけと称して手を上げるのは、虐待にあたるケースが多いので慎んでください。続くようでしたら、親権の剥奪。および、保護という流れになりますので」

事務的に語るアルトに、アネツ口は微笑し頷いて見せた。

「わかりました、気をつけましょう」

硬直から少しだけ回復したアンシヤが、二人の間から震える声でアネツ口に問いかける。

「手続きという事は、血は繋がってないのですよね？」

周囲の雑踏に消されそうなほど小さなものであったが、それでも聞き取れなくもない。

しかし、あえてアネツ口は聞こえなかった振りをして、前列に配置された男二人に笑顔を向けた。

「さて、他に何か問題でもありましたか？」

「いえ、本日は注意勧告というところで。これで失礼します」

もの言いたげなアンシヤを、背の高い彼がやんわりと、だが有無を言わさぬ様子で肩をつかんでいる。

表通りへと出て行く彼らを、猫目の彼がつまらなそうな顔でついていく。

「ご苦労様でした。ああ、そのつり目の君。人手が足りなくて困っているのですが。少し手伝って貰えませんか？」

「いや、公務がありますんで」

「毎度のこと人を犯罪者扱いたした拳句、謝罪もなく。立場が上ならば、民を踏みにじっても構わない、と。そういう事ですか」

少しばかり声を大きくすれば、通りを歩く人々が振り返る。女と押さえつけている男の動きが止まり、紫色の瞳をした猫目の彼は小さく呻き声を上げた。

「少しならいいっすか、コレット先輩」

「民の役に立つ事も仕事の一つだ。少しだけなら構わないだろう」

猫目の男は、わずかに不敵に笑みを張り付けたアネツ口へと目を向けてから、ゆっくりと離れていく二人に手を上げた。

私も残ります　そんな声が聞こえてきたが、関係者達はなかった事にした。

古巣を窺う猫

足音をさせず、しなやかに踏み込んできた彼を中に入れ、扉を閉めた。

小さく軋む階段をのぼり、事務所へと入る。

「お前が一級捜査官の部下、ですか」

客用として置いてある革張りのソファに、自分の場所だともいうように腰をおろした彼を横目に見ながら、アネツ口は事務所に足を向けた。

猫目の男ガト「オツキ才は、革張りソファに身を沈め、長い足を組む。光の加減で色の変わる紫色の瞳をくるりと回し、口の端を持ち上げた。

「俺もなかなかやるもんだろ」

「なれた所で、警邏隊の下っ端からかと思っていましたが」

「俺様が警邏で埋もれるなんてもったいないって、上の奴らが見抜いたんだろ」

「私が聞いた事実とは違いますがね」

鼻で笑ったアネツ口に、ガトはささやかな抗議の意を、ソファの肘置きを軽く叩く事で表す。だが、抗議を受けるべき男は、書類に目を落とし相手にしていない。

「ったく。相変わらず粘りつくような言い方するな、あんた」

「たった一月ごときで、私が変わるとでも？」

「変わるわけないわな。そもその問題が解決していないのに、変わるわけがない」

茶化すように笑うと、少しだけ目を上げたアネツ口に、ガトは肩をすくめて見せる。

「言っとくけど。俺様を引っ張り込んでも、魔法に関する新しい情報はないぜ」

その一言で、ただでさえひんやりした部屋の空気が、一気に張り

詰めたものになる。

突き刺すような冷ややかな視線を、ガトは窓の外に眼をやる事で受け流した。

「魔法など存在しないと、何度言ったら分かるのか」

「原因究明されてないだけってんだろ？ 不思議な現象だから、とりあえず魔法って事でいいだろ」

「良くはない。絵本の流行に惑わされた言葉で括るなど、愚かでしょう。人間がかかわっている犯罪を、幻想にして欲しくありませんね」

「……俺には、あんたが絵本を読んでるってのが驚きだけど」

「少々の物ならば、目を通していますよ。知識は豊富であればあるほど良い。お前はそこを怠っているから、小さな物事を見落としがちなのですよ」

アネツ口が諭すように言えば、彼は紫の眼を細めて立ち上がった。

「ああはいはい。結局、俺が愚かだったとこに辿りつくんだよな。」

用がないなら、戻るかな。このソファも居心地が悪くなったもんだ」

「うちの働き手じゃなくなったのだから当然でしょう。領主の犬なのですから」

「犬で。ひでえな」

書類に目を落としてしまったアネツ口に、ガトは抵抗するでもなく、そつと嘆息した。

「あの金髪君が使い物にならなくて、俺様に戻って来いとか、泣きついてきたかと思っただのに」

その言葉に、アネツ口はおもわずといった調子で笑い声をあげた。眼鏡の位置を直しながら、ダークブラウンの瞳を向ける。

「見習いよりも下層にいるお前が、どんな顔をして泣き言を並べるのか。この目で見てみたかっただけですよ」

「……あんたは。本当に、相変わらずだな。だが意外とあつちも楽しいぜ？ アンシャちゃんか、俺様をダシにしてまでお前に会おうと画策する様は、なかなか見物だし」

「そんなものですか。彼女が領主に直談判までして得たものが、お前だと言うから興味深かったのですが……仕方ありませんね。最下層の、さらに下っ端をつついて、何も出ないでしょう。仕事という仕事もないでしょうけど、戻って構いませんよ」

「分かってたけど、嫌なヤツだな。俺様が抜けて、床に頭こすりつけてでも戻って来て欲しいって懇願してもいいんだぜ」

「なるほど。私にそうして貰いたいと？」

ぞっとするような笑顔を向けられ、ガトはソファの背もたれに手を置くと、そこを支点に飛び越し、盾にした。

「……冗談だつて。あんたが跪ひざまずいたら、俺は逃げるぞ。あからさまに怪しいだろ」

「失礼ですね。私はいつでも言いたい事を言っているだけですよ」

「おう、言いたいようにな」

「人間、素直が一番ですからね」

どうだかなと呟いて、ガトは出入り口まで下がった。

「もう用はないよな。ったく、仮にも捜査官だつてのに、お茶の一杯も出しやがらねえし」

「おや、これは失礼しました。下っ端の下っ端だと、どのくらいなら出せますか？ ここの所、茶葉も安くないものでしてね」

「そうだった。俺、もうここの働き手じゃなかったつ。帰るわ。

どうせ水もタダじゃないんだろ」

「ご存知の通りですよ」

眼鏡をかけ直し、ペン先をインク瓶に入れる。

もう話す事はないという空気を察し、すでに彼が見ていないと知っていて、じゃあなと軽く手を振って、ガトは姿を消した。

数枚の書類に署名し、別紙に一筆書いて封筒に入れた。宛名はライアン・ラクルスイ。伯爵の位を持つ、若き現領主の名前である。

静寂の戻った部屋の中、陽が山の峰に沈みかけているため、オレンジ色の光が窓から差し込んでくる。書類の入った箱を机の引き出しにしまい、鍵の束から小さな鍵を取り出し、閉めた。

扉にも鍵をかけ、階下におりると風呂場から甲高い声が聞こえてくる。

忘れていたわけではない。風呂場の鍵を開ける前に、アネツ口はパンと水を入れたポットをストーブのそばに置いた。

「おい！ 今そこに誰がいるだろ！ いるって分かっているんだからな、ここ開ける！」

「騒がしいですね」

「騒がしいじゃねえよ！ 全身ふやけて人相変わったら、どうしてくれんだよ！」

「そのまま見世物にされたくなければ、静かにすべきだと思いますがね」

アネツ口の言葉に、風呂場の主は沈黙した。一度床を踏み鳴らした事から、どこにもあたれないストレスを発散させたのだろう。

アネツ口は鍵を開けに行くでもなく素通りし、テーブルに封筒を置くと、青い封蝋をたらし、はめていた指輪で封印した。片翼の獅子のマークが、蝋に刻まれている。

堪えきれなくなったのか、風呂場の戸が音をたてて揺れた。

「開けないのかよ！ おとなしく待っててやったのに！」

封筒を棚の上に乗せ、アネツ口は苦笑した。

「口が悪いですね」

「そういう育ちだ、しょうがないだろ！」

わざと足音をたて、戸口の前まで行く。

今度こそ開けて貰えるのだろうと、向こう側で息を潜めたカリダに、アネツ口は楽しげに歪んだ口元に手をあてた。

「良い機会です。言葉遣いというものを覚えなさい」

「はあっ？」

「正しい言葉で願い出る事が出来たら、ここを開けましょう。服もサービスします」

「なんでそんな事までしなきゃいけないんだよ！」

「無駄に悪ぶっているようでは、恥をかきますからね。仕事に影響

するととなると、死活問題です」

さらりと言うアネツ口に、カリダが勝ち誇ったような声を出す。

「勝手に恥をかけばいいだろ。あなたの仕事がどうなったって、おれには生きるとか死ぬとか関係ねえし」

だが、さらに上をいく余裕ある声で、アネツ口はおかしくて仕方がないとも言つのように言葉を口にした。

「他人事ですね。全部、カリダの事だというのに」

「は？」

「私に借金がある事を、忘れましたか？ 金貸しは接客業ですからね、人相手となると言葉遣いは必要不可欠。金を返せないとなると、生死にかかわる事になるかもしれません」

「なるかも……って。そんなの、あんた次第だろ」

「その通りですよ。覚えるまでもありませんが、ジユダス商会は、どなたにでも金を貸します。そして確実に回収します。例え、どんな手を使ってでもね」

さて。と、言葉を区切る。

冷え切ったせいなのか、これから起きるであろう災難を想像してか。とにかく身体を震わせて、カリダは奥歯を噛みしめた。

「どうしますか？ どうしても嫌だと言うのなら、仕方ありません」

「……諦めてくれるのかよ」

「面白い事を言いますね」

板越しに笑い声が聞こえてくる。

その楽しいな声音のまま放たれる、恐ろしい言葉をカリダは耳にした。

「そうですね。そこから引きずり出して、まずは指を一本ずつ……」

「ごめんなさい！ おれが悪かったでした。ええと、そろそろ鍵を開けてくれるかな」

「今までの事、大変申し訳ありませんでした。お願いします、鍵を開けて下さいませんか」

「長過ぎる。なに言ってるのかわかんね……わからない」

悲鳴に近い声をあげ、カリダは濡れた頭を抱え込む。

声を聞く限り、それがあまりにも切実な訴えに聞こえ、アネツ口は嘆息した。

「仕方ありませんね。ならば、まず自分の事を俺と言つのをやめなさい」

「……えー」

「足の指が消え失せても良いなら、構いませんがね」

「……わかったよ」

「分かりました。だ」

すぐに言い方を直し扉を蹴れば、飛び上がったような水音がした。壁に反響した金切り声が、即座に返ってくる。

「わかりました！」

満足はしていないが鍵を外してやり、戸を少し開ける。浴布を隙間から差し入れてやると、すぐに奪い取られ、口の中でなにやら文句を言っているようだった。

町の中の獵場

少女の食べっぷりは、相当なものだった。

全て手づかみという点は、今回だけは見逃した。痩せ衰えた獣のような者を、今は人間にまで引き上げなくてはならない。

人間とりあえず腹が満たされれば、考えにも余裕が出るものだ。襟のついた白いシャツに、薄茶色の少し丈の足りないズボンを身につけたカリダは、一見して少年そのものに見える。

アネツ口は流し台に腰を預け、彼女の背後から腕を組んで眺めていた。

「これからは食事の支度を、カリダに任せましょうか」

その言葉に、カリダの口から卵が少し飛び出し、テーブルに散らばった。もつたいたいと言いながら、テーブルに落ちた残骸を拾ってまた口に入れたカリダに、アネツ口は眉間にしわを寄せた。

「汚い」

「もつたいたいだろ？」

当然だと、口に物を詰め込み振り返ったカリダは、アネツ口の表情を見て固まった。

「いや、だって……」

「口から物を吹き出したり、あまつさえそれをまた食べるなんて事は、今後一切ないように」

「そんなの、ボスが吹き出させるような事言うから！」

「何を言われ動揺しても、私はそんな汚い真似はしませんよ」

あなた自身が、汚い存在じゃないかという言葉を、カリダは必死に飲み込んだ。

アネツ口に対して、今までの言葉使いを変えろというのも複雑で。金髪男のように、アネツ口様とは気恥ずかしくて呼べず。だが、命だけは惜しいのだ。

言って許される事と許されない事を、手探りで進んでいる状態だ

つたが、こればかりは飲み込むべき事柄だと、学のないカリダにでも分かる。

「……気をつけるよ」

「食事も終わつたようですね。片付けたら出かけますよ」

「え、もう暗くなるけど」

「借金取りは、これからが忙しくなるのですよ」

彼の顔は、笑顔であるというのにゾツとする冷たさをはらんでいった。

最後の一カケを、惜しみながらも飲み込んで。カリダは皿を水に入れた。

「出かけますよ」

「うん。あ、違った。はい」

横目で見下ろしてくる暗い色の瞳に、カリダは慌てて訂正した。

衣類の中から、暗い色の上着を引っ張り出しカリダに手渡すと、

二人は裏路地に続く扉から外に出た。

陽の沈んだ町は、山間でもある事から、ひんやりとした澄んだ冷たい空気に包まれている。

暗がりには、アネツロの持つランプだけが暖かい光を帯びていた。

「悪いやつが、夜を好むつての。わかる気がするよ」

辺りを警戒しながら、アネツロの後にくっついて歩くカリダが言え、アネツロがうなずいた。

「そうですね。黒い人間は、夜が似合う」

カリダは、振り向きもしないアネツロの後頭部を見上げた。

顔を背け、そっと息を吐き出せば、立ち止まったアネツロの背中にぶつかりそうになる。

「あぶねえな！」

文句を口にすれば、後ろ手に口をふさがれた。

前方から、走ってくる男がいる。大きな鞆を抱え、息を切らす太った男だ。

カリダを路地にいるよう手で合図して、アネツロはゆっくりとラ

ンプを胸の辺りまで持ち上げる。

「おや、ダニーさん。お急ぎですか？」

アネツ口に気がついたダニーは、顔を引きつらせて立ち止まった。昼間からモネータに見張らせていた、花屋の店主。それが今、目の前にいる。

丸々と太った男は、脇に抱えた鞆をさりげなく背中側に回した。

「こ、これはアネツ口さん。ええ、ちよつと急いでましてね」

「そうですか。誰かに追われでもしているかに見えましたが」

「い、いや。そんな事は…… ああ、すみません。本当に急いでいるもので。これで失礼しますよ」

アネツ口が左肩をひいて道を譲る。背中を丸めて、通り抜けたダニーは、鞆を胸で抱えなおした。

緊張と安堵が緋い交ぜになり、ダニーは振り向きもせず息を吐く。

「口が、笑ってんぜ」

壁を越えたと思った瞬間、痩せた子供が目の前にいた。

「なんだ、お前は！ どけっ！」

「やましい事があると、人間大きな声を出しがちになると聞きます。至近距離で声がして、巨体が小さく震えた。

慌てて振り返れば、冷たい眼をしたアネツ口がランプをダニーの顔に突きつける。

「どこに行こうと？」

暗がりに慣れた目には、蠟燭の火とはいえ、眩しく映る。

目を瞬かせダニーが後ずされば、手で押しとどめられた。小さな子供の手ではない事に気がつき、大きな身体を強張らせた。

「モネータ、上出来です。追い込むのがうまくなってきましたね」

「ありがとうございます」

カリダとダニーの間に割って入るようにして、モネータが立つ。

大きな背中に守られたと感じたカリダは、眉を吊り上げて金髪男のふくらはぎを蹴飛ばした。だが微動だにせず、振り返りもしない彼に、少女は気に入らねえ、と口にした。

前後をふさがれ、ダニーのへりくだっていた態度が一変した。

「何の用があるってんだ！ こっちは急いでるんだ！」

「決まっています。私が来たとしたら、用件は金ですよ」

「そ、それは……今からなんとかしようと思ってるんじゃないか」

「具体的には？」

ランプをおろしても、ダニーは歪めた顔を元に戻さない。

カリダが砂を踏みしめた音を耳にして、ダニーが思いついたように胸を張った。

「花の、買い付けだ」

「それは正しい決断ですが。こんな日暮れに馬車も呼ばず、密かに店を抜け出す理由になりますか？」

「そんなもん、後ろの奴に言ってくれ！ 外に出た途端、追いつて立たれたんだ！」

まくし立てるダニーに見えるよう、腰から短い鞭を取り出し、地面に向かって振りおろす。

暗くとも、風を切る音が聞こえたのだろう。怯えた顔をして後ずさるが、またモネータに背中を押しえられた。

「ほ、本当なんだ！ 悪いのは、こいつだ！」

「私の部下が、そんな初歩的な間違いを犯すとても？」

アネツロが一步踏み出した。

ランプの光が近づき、それぞれの影が白い壁に、ぼんやりと映って揺れる。

下がるに下がれず、ダニーは光が近づくにつれ精神的に追い詰められていく。

「来るなっ！」

武器を持っている目の前の男につかみかかるわけにはいかず、若い男と子供がいる方向を選んだ。

奇声をあげ、抱えていた鞆を振り回し、貴婦人方に人気の高い顔にぶつけた。つもりだった。

動きを読んでいたモネータは一步下がり、鼻先の距離で避けてい

た。

振り回した勢いに負け、安定を失った男は大きな音をたててひっくり返る。

鞆が手から離れ、慌てて起き上がろうとした時には、アネツ口が鞆に足を乗せていた。

「この……！」

身体を起こし鞆に手を伸ばせば、容赦なく鞭が振り下ろされた。

背中に大きな衝撃を受け、ダニーはくぐもった呻き声を出して地面に突つ伏す。

左腕をねじり上げられ、少しでも動けば激痛が走る。背中は膝で押さえつけられているようだった。右手首は酷く痺れ、動かす事も出来ない。

動けなくなった事を見届け、鞆から足をどかす。中をあらためると、ソルデイ紙幣が乱雑に詰められていた。

「買い付けにしては、金を雑に入れていますね。まるで、夜逃げでもするようだ」

「俺は財布なんざ、持ってないもんでね」

下卑た声で笑う男の腕を、モネータが遠慮なく締め上げてやると、悲鳴をあげて大人しくなった。

そちらを見る事なく、勘定を始めたアネツ口は、すぐに嘆息した。「やはり、足りませんか」

「た、頼むよ。その金がないと、遠くに住んでる俺の娘の治療が出来なくなるんだよ」

眉間にしわを寄せたモネータが、アネツ口を見る。

しかしアネツ口は、それを無視した。

「だから、何だと言うのです？ 借金の期限は、とうに過ぎているのですよ。最優先に考えるべき事は、借りた物を返す。しっかり働いていれば、治療費とて生み出せるほどの金利のほずですがね」

「心配で、仕事が手につかなかったんだ！」

「本当に治療費が必要であるのなら、それこそ身を粉にして働いて

いるはずでしょう」

手を緩めかけていたモネータは、さきほどよりも強く男を地面に押し付けた。

呻き声すら嘘臭く聞こえ、男の腕が折れそうなほどに軋む。

「腕一本くらい折っても、こいつきつと変わらねえと思うけど？」

カリダが、さすがに呆れた声を出せば、やっとモネータが少しだけ力を緩める。

アネツ口は、ただ一度目をやっただけで、鞆を持って立ち上がった。

「これは回収させていただきます。店と居住地も差し押さえます」

「ど、どうやって生きていけばいいってんだ」

必死に声をあげたダニーに、凍てつく眼を向ける。

「調べれば、お前を追っている人間がいくらでもいそうですし、連絡をとってやってもいいのですよ」

完全に抵抗しなくなった男を放すよう、モネータに合図すれば、不服そうな表情を浮かべながらも腕を離し、立ち上がった。

のろのろと立ち上がり、丸々した身体をゆすりながら、男は暗がりには消えていった。

「アネツ口様。あの男こそ、私兵に突き出すべきでは？」

「放っておけ。あいつはこの先、長くないのですからね」

帰りますよ。と声をかけて、アネツ口は路地を入っていく。

腑に落ちないながらも、後に続くモネータを眺め、カリダは黒く染め上がった空を見上げた。

おそらく、言葉の通りなのだとしたら、すでに方々に連絡を入れているに違いない。自業自得ではあるが男の行く末を考え、首をすくめる。

「……こわっ」

小さく呟いた声に、夜空に広がった星が同意するかのように瞬いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3894q/>

金貸しアネッコ

2011年11月16日03時17分発行